

斎藤英喜著

〈角川選書〉

紹介

『読み替えられた日本書紀』

KADOKAWA 令和二年十月 四六変形判

三〇四頁 本体一七〇〇円

読み替えられた
日本書紀

斎藤英喜

本書は、『日本書紀』が時代の要請に応じ当時の最新の知をもって「読み替えられて」来たこと、いわば新たな神話が創造されてきたことと時代の権力との関りを古代から現代まで通史的に検証した意欲作である。

中世の様々な『日本書紀』注釈書は科学的文献主義の家永三郎以来、価値の低いものとされてきたが、一九七二年に伊藤正義が発表した「中世日本紀の輪郭」の登場により、評価は一変したと著者は述べる。中世の数々の「神話」の再創造に関わった担い手たちは、「日本紀の家」ト部氏、伊勢神宮の神官、撰閲家の貴族知識人などであった。元寇を経て、鎌倉幕府の権力が動揺し始める時代、ト部氏により最初の本格的な日本書紀の注釈書『積日本紀』が編纂される。『積日本紀』はト部氏と一条家による問答があり、筆者は両家による共同研究的な面を指摘する。『積日本紀』は近代文献学的な要素を含み評価が高い。一方、中世神話には地獄の閻魔大王とスサノヲを

同体と看做す、アマテラスの御神体が蛇体であり仏教を広める役割を担ったなど、やや荒唐無稽な説を含む。

この後江戸時代に本居宣長が登場するが、『古事記伝』もまた『古事記』と『日本書紀』の融合した神話の読み替えであり、平田篤胤の『古史伝』に至ってはよりラディカルな読み替えだとし「近世神話」と筆者は呼ぶ。近現代、それまでの文献学の成果をうけた『日本書紀』の解釈とリンクして「日本」という自己認識が確立していく過程が語られている。著者は「あとがき」で日本書紀を読んできた歴史は実は「読み替える」ことでもあるとし、「そのことをもつともラディカルに実践してきたのが中世という時代であった」との認識を示している。史資料に基づいて、これまでの日本書紀の受容と解釈の歴史が学問的水準を保ちながら通史的に分析されており、読み物としても興味深く読み進められるものとなっている。

紹介

原武史・菅孝行・磯前順一・島菌進・大澤真幸・片山杜秀著

『これからの天皇制——令和からその先へ』

春秋社 令和二年十一月 四六判 二七二頁 本体二二〇〇円

本書は、論壇でも活躍する著名な知識人たちが、令和という新時代を迎え「天皇制」の関心領域について講義形式で論じたものである。各々、原「『平成流』とは何だったのか」、菅「天皇制の『これから』」、磯前「出雲神話論」、島菌「国家神道と神聖天皇崇敬」、大澤「天皇制から読み取る日本人の精神のかたち」、片山「『象徴天皇』と『人間天皇』の矛盾」の題目で論じている。

原は、天皇と国民の関係を強化した「平成流」の皇室の在り方を分析、菅は「天皇制」を国家権力の構成要素と定義し、磯前は大国主命を天皇家により封じ込められた存在であるが、完全には閉じ込めることが出来ない不思議な力を持つ存在であると捉えている。島菌は天皇制度と国家神道について論ずる。村上重良の国家神道の見取り図を受け継ぎ、国家管理下の神社神道を国家神道と看做す立場に対しては、神社と天皇制・国体論の連続性を視野に入れずして「国家神道の見えない化」を促進し

ているとして批判する。島菌は、広義の国家神道論の立場から、神社神道と国体論と天皇崇敬は地続きであり「神聖天皇崇敬と一体の国家神道」というのは、いかに強力に展開したかが見えてくる」と述べる。戦後のいわゆる象徴天皇制下でも、神聖天皇崇敬と結びついた神社神道はなお健在であると、島菌は強調する。大澤は武士と天皇の関係や日本人の精神の形など、歴史と伝統から天皇制を考えようと試みるが、将来的には天皇制度に選挙制度の導入を考えべきと提言するなどの主張も見受けられる。片山は、令和現在の状況として天皇の影が薄くなり、首相の存在が強権的で大きくなっていると問題提起する。このように各論客が、これからの天皇制について分析しあるべき態様に関しそれぞれの切り口で述べている。将来の皇室の在り方を考えていく上で、忌憚なく議論を活発化する敲き台として、基本的立場を異にする論者にとつても価値がある本の登場と言えよう。



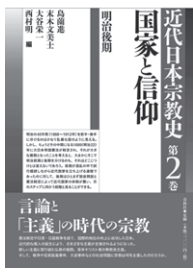
島蘭進・末木文美士・大谷栄一・西村明編

紹介

『近代日本宗教史 第2巻 国家と信仰—明治後期—』

『近代日本宗教史 第4巻 戦争の時代—昭和初期〜敗戦—』

春秋社 令和三年一月・五月 A5判 二六〇頁・二八〇頁 本体三二〇〇円・本体三三〇〇円



紹介する二冊は、「近代日本の宗教史を知ろうとするならば、まず手に取らなければならない必読書となることを目指」して、企画されたシリーズの第二冊目と四冊目である。シリーズ全体を通じ、①神道、仏教、キリスト教、新宗教などの動向に広く目配りし宗教界全体の動向がわかるようにする、②国家政策・制度、思想・信仰、社会活動など宗教をめぐる問題を日本史学・政治学・思想史学・社会学など、学問の垣根を越えて解明するため宗教学者だけでなく他分野の研究者にも協力を仰ぐ、③本文では主要な動向を筋道立てて論じ、特定の問題にはコラムにより光をあてる、などの編集方針が「巻頭言」で語られている。つまり、近代の時代を辿りながら、その時代時代の代表的な宗派と宗教団体の動向を分析するという構成となっている。

第2巻では、西洋思想を受容した近代主義が各宗教メディアで主張される明治後期にスポットが当てられる。

特に、国家とキリスト教・仏教・神道など代表的宗派との関連や、神社神道と教派神道の関係、皇室と神社の民衆レベルでの結びつきなどに焦点があてられる。

第4巻で、島蘭は「総論—総力戦体制下の新たな宗教性と宗教集団」で、神聖天皇への崇敬が国民に浸透し、天皇崇敬と地続きの国家神道が上からの国家的レベルと草の根の庶民レベルの二元構造で内実ともに強化されるという見取り図を示す。各論では、思想と宗教統制、植民地政策と国家神道・仏教、戦争協力と抵抗、新宗教とナショナリズム、戦争・哲学・信仰、超国家主義と宗教などについて分析が加えられている。当時の国家神道をめぐる社会状況につき個々の事実を検討すると、天皇崇敬を軸とし庶民レベルまで浸透した国家神道的イデオロギーの表出では説明がつかないことも見受けられ、一層の研究の進展が期待される。当時の宗教をめぐる諸問題について、通史的な理解を得る上で便利な本である。

宮本常一著・宮本常一記念館編

〈宮本常一ふるさと選書第一集〉

紹介

『古老の人生を聞く』

みずのわ出版 令和三年三月 菊判 八八頁 本体二二〇〇円



著者の宮本常一（一九〇七—一九八二）は山口県屋代島（周防大島）の出身。澁澤敬三の薫陶を受け民俗学者の道を歩みだす。生涯に渡り日本各地を離島に至るまでフィールドワークし、膨大な記録を残した。昭和十四年、澁澤の主宰する「アチック・ミュージアム」の所員となり、東京水産大学講師、武蔵野美術大学教授を歴任し、離島振興運動の指導者としても活動した。『忘れられた日本人』（岩波文庫）は人口に膾炙している。

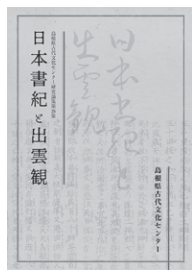
本書は宮本常一記念館の編集により刊行、「ふるさと大島」、「奇兵隊士の話」、「世間師」、「梶田富五郎翁」の四編が収録されている。この四編は初出後、『宮本常一著作集』（未來社）に再録されたもので、同著作集が本書の底本となっている（「世間師」、「梶田富五郎翁」の二編は『忘れられた日本人』にも収録）。「ふるさと大島」以外の三編は、宮本の郷土である周防大島生まれの古老からの聞き書きである。世間で広く見聞を広め人生経験を積んだ

人を周防大島では世間師しよけんしと呼んでいた。「世間師」には慶応元年の長州征伐の時分の島の若者に関し、「とにかく世間師で、無鉄砲なところがあり、何か事の起こるのを望んでいたのである。そこで戦争が始まると実によく働いた。この戦争は一種の郷土防衛線であったから武士も百姓も区別なしに働いた」との記述がある。このように「世間師」や最も初期の作品である「奇兵隊士の話」など、幕末から明治期に移り変わる激動の転換期に同島の人々がどう外部と関わり合い、そして生きたのが当人の語り口で生き生きと語られている。中央から離れた離島で生きた人々の営みから、近代日本の時代と人間の関りの一面が理解できよう。本書では丁寧な用語の解説、当時の写真や図版の挿入により読者の理解を助ける工夫がされている。宮本常一の学問の入門書としてもわかりやすく、民俗学を初めて学びたい人にも本書を広くお勧めする。

紹介

『日本書紀と出雲観』

ハーベスト出版 令和三年三月 A4判 二八五頁 本体二〇〇円



日本古代の正史『日本書紀』には国譲り神話を始めとする様々な出雲に関する伝承が記述されている。本書は『日本書紀』と出雲の関りについて、「古代から近現代に至る一三〇〇年間の過程を総覧」し、その研究成果をまとめた論文集である。神道学・文学・歴史学・民俗学など様々な分野の研究者が執筆し、様々な観点から、出雲観の形成過程が分析されている。佐藤雄一は『出雲』をめぐる思想的展開―研究史の整理―で、国譲り解釈としての顕幽論についてまとめている。とりわけ平田篤胤以来の幽冥界神学が継承されるも分裂していき、明治に至り津和野派の国学者が台頭し祭神論争における千家尊福の顕幽論にいたるまでをまとめている。西岡和彦は、『近世杵築周辺の「神学」で出雲大社を中心とする杵築周辺の神学を分析している。近世の出雲大社は、権限保証の「永 宣旨」の下賜により出雲国造の「出雲国神社惣検校職」となっていた。しかし、佐陀神社との争論に

敗れ、出雲国内の神職はほぼすべて吉田家から許状を受けることになり「惣検校職」の続行は断念した。しかし、出雲国造が天皇の守護神を祀り皇統無窮を祈り続けることに変わりはなかった。失地回復の間、皇統守護の祭神を天照大神が讃えて創建されたのが出雲大社であるという垂加神道の神学が新たに確立していったことが指摘されている。田中聡は『近代史学史からみた「古代出雲」観の変遷』で、野津左馬之助が主に執筆した『島根県史』に注目し、古代出雲像の変遷を跡付けようと試みている。田中によれば、『島根県史』には国学者の記紀神話解釈、比較神話学、記年論、人種・民族論、神代史等多岐にわたる要素が入っている。本書は、多彩な分野の研究者がそれぞれの立場から、独自の出雲観の形成に関し『日本書紀』との関連を踏まえつつまとめており、非常に興味深く読み進めることができる。

紹介

松井嘉和著

〈神社新報ブックス〉

『世界の『古事記』と神国日本』

神社新報社 令和三年四月 新書判 二五三頁 本体一三〇〇円



著者は大阪国際大学名誉教授で、国際的に活躍してきた経歴を有する。国際化する世界の中で、わが国の歴史・文化を守りつつ寛容性をもって相互理解を増進すべしという立場から本書は書かれたものである。「第一部 世界の『古事記』」では、様々な言語で翻訳された『古事記』について述べられており、英語やドイツ語、フランス語のみならずマジャール語やシンハリ語、セルビア語などの少数言語にも翻訳されている事実を確認できる。「古事記」の最初の外国語訳は伊藤博文によってなされたのか」といった興味深い論点にも触れられている。「第二部 『古事記』と国語」では、古事記の成立と日本語や文字の成立の関係が分析されている。「第三部 大嘗祭の歴史的社会的意義」では、著者が滞在したタイ王国の即位式などとも比較され、「大嘗祭は、神話が再現されて、それが今ここに行はれてゐるといふことが最も重要な本質です（中略）近代化や合理化が推進され

つつある現代に神話の再現が実践されてゐることが、世界から稀有な奇跡的現実だと驚嘆されて、日本はその伝統文化の持続性によつて賞讃されてゐます」と述べられている。「第四部 上皇陛下・上皇后陛下ポーランド御訪問とその余薫」では、筆者が長く滞在したポーランドへ、上皇陛下・上皇后陛下が平成十四年に訪問したことに関し、陛下の温かく細かな心配りが偲ばれるエピソードが述べられている。著者は、国際経験を重ねる中で日本の文化に対するきちんとした認識を持つ必要性を感じ、坂本太郎「日本歴史の特性」に出会った。この出会いにより、天皇の御存在とその歴史が日本文化そのものであるとの確信を持ったと著者は語る。著者には、幅広い国際経験を通じて得た日本の歴史・伝統の根幹に対する新たな認識を読者と共有しようという姿勢がうかがわれる。そして、本書は日本の国柄・伝統について再認識する契機となる本であるといえよう。

上野誠著

『教会と千歳飴―日本文化、知恵の創造力―』

紹介

小学館 令和三年四月 B6判 二七二頁 本体二二〇〇円

著者は万葉学者として著名であり、『万葉集』とりわけ万葉挽歌の史的研究所と万葉文化論を専門としている。しかし本書は、『万葉集』に関するものではなく、日本文化論全般の楽しい話題で満載である。タイトルは、著者の母がカトリック教会奉仕会の役員の際にマリア像入りの千歳飴袋を考案したという、宗教的な寛容さを示すエピソードに由来する。

本書は、「農耕の知恵」「交易の知恵」「宗教の知恵」「政治の知恵」「芸術の知恵」「歴史の知恵」の六章からなる。著者は、自然崇拜と精霊信仰からくる互敬と信頼の関係を日本の基盤とし、契約の観念がないとし、日本では罪と罰、善と悪も相対的であり、その時々々の状況で決まるものであることが指摘されている。日本に近代西欧社会的な契約観念が希薄であるという分析は古くは法社会学者の川島武宜も指摘するところである。契約の観念が希薄な日本は無秩序ではなく、「契約しない」と

いう契約をしている」社会として成立していると著者は述べる。「おてんとうさまが見ている」という教えは、正直者しか生きてゆけない不寛容さを孕んだ究極の残酷な道徳教育だとの考えは独特で面白い。「政治の知恵―大愚のリーダーを求める気質と『原恩主義』」では、社会学者見田宗介の提示した、キリスト教社会の「原罪主義」に対する日本の「原恩主義」との見方に賛意を示している。日本人は、あらゆるものや人に感謝をしながら恩返しをするために生きていく行動規範を持つとの捉え方である。

著者は「あとがき」において「本書は『今』『ここ』『私』を軸として語る日本歴史文化論（中略）六十歳の今の私が考える日本の歴史文化の特性、今の私が考える世界像を、余すところなく自由に語ってみたかったのである」と述べる。日本人の知恵、思考行動様式、文化などから日本と日本人の本質に迫ろうと試みた好著である。



岡田莊司・小林宣彦編

紹介

『日本神道史（増補新版）』

吉川弘文館 令和三年四月 四六判 四二〇頁 本体三五〇〇円



旧版の岡田莊司編『日本神道史』は、古代から現代に至る神道通史を学ぶ教科書的入門書として版を重ねてきたが、本書は初版から十年余りを経ての増補新版の登場である。

「第一部 神道とは何か」では、神道の成立、祭祀体系の構図、天皇祭祀、神道信仰の精神性・本質など、基本的見取り図について記述される。「第二部 神道の歴史」では、公的な神祇制度の推移、仏教・儒教・道教など異文化との交流、神祇制度と地域社会の関り、庶民信仰の展開、神道をめぐる学問的・理論的な展開など、各時代の特徴的なものが抽出されている。「第三部 神社分布と神道の現在」では最新のデータに基づいた神道信仰の現在が鳥瞰的に分析されている。歴史的事実と史料に基づいたオーソドックスな神道史であるが、これまでの岡田氏の学問的研究成果の反映も見受けられるところである。たとえば祭祀の本源として「みこともちて

……よさし」の循環構造・天上と天下と不離一体の構成を上げ、祭祀権の二重構造と循環型祭祀体系などに関する記述である。また、古代の律令制国家は、天武期に天皇「内廷」と国家「内廷」の二重構造が確立し、天皇祭祀に限られており、地域の氏族祭祀には天皇といえども直接関与できないことなども記されている。祭祀に関しても天皇祭祀権と氏族祭祀権の二重構造となっていたことが示されているのである。このほか新版では、律令国家の祭祀構造、また宗像沖ノ島の祭祀遺跡の考古学的分析とヤマト王権との関係などに新たな知見が加えられている。巻末の「『延喜式』諸国式内社座敷一覧」、「諸国一宮一覧」も新たに加えられ親切で便利である。研究者が基本的な知識を身につけるうえで入口となる水準の高さがあり、神道を本格的に学びたい人にとっては素晴らしい増補新版の登場と言えよう。

紹介

小倉慈司著 〈同成社古代史選書〉

『古代律令国家と神祇行政』

同成社 令和三年六月 A5判 三四六頁 本体八〇〇円

本書は、国立歴史民俗博物館研究部准教授である著書が、これまでの七世紀から九世紀を主な対象とする古代神祇行政制度に関する研究をまとめたものである。「第一部 古代神祇行政研究の展望」、「第二部 官社制度の成立と展開」、「第三部 神祇官と地方神社・在地社会」の三部構成からなり、律令神祇行政・天皇と神祇祭祀・官社制度・地方神祇行政・神戸・神田・在地社会との関りなどを論じた全九章と付論一編から成る。著者は、「本書全体を通じて、古代日本における国家と神社、在地社会との関係を明らかにすることを狙った」と述べる。第一部の第一章で、神祇研究について近世から近代戦前期、戦後までの先行研究がまとめられている。近年、研究の進展に伴い神祇イデオロギーの重要性が理解され、神祇祭祀の背景に存在する思想の再検討が喫緊の課題であると述べられている。第二章では、崇る神々との概念を主軸とし、天皇と神々の祭祀の関りについて再考して

いる。第二部では、「式内社」の成立における延喜神名式「貞」「延」標注に検討を加え、標注の信憑性の意義を論じている。第三部では、神祇と地方神社、在地社会との関係性が論じられる。神戸と律令神祇行政、特に出雲国の神戸について最近の考古学の研究の進展を踏まえ豊富な史資料をもって分析されている。今まで等閑視されてきた在地社会の村落祭祀にもスポットが当てられている。最終章では、越中国東大寺領荘園の神田を分析、首長層と在地社会の関係が検討される。付論では、古代東アジアの「神」信仰の分析も示されている。専門的な内容ながら、神祇祭祀に関する先行研究がよくまとめられており、筆者の問題意識と手法が明確であるため、理解がしやすいものとなっている。古代の神祇祭祀、とりわけ今まで研究の手薄だった在地社会の村落祭祀への首長層の関りについて興味がある方にお勧めしたい。

